

魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名: 児山 卓史 所属: 神奈川県立平塚養護学校 記録日: 2022年2月26日
キーワード: コミュニケーション力向上、行動調整

【対象生徒の情報】

- ・学年 高等部2年
- ・障害名
脳性麻痺
- ・障害と困難の内容
 - ①次にやることなどを思い出して自身で行動するのに時間がかかる。
 - ②疲れた時に適宜な休憩を取る方法がわからない。
 - ③-1 自分の考えをまとめて発表するのが難しい。
 - ③-2 小さい声や伝わりにくい表現で話すため、初見の人に伝わりにくい。
- ・使用した機器に iPad iPhone watch chromebook AIスピーカー Pepper

【活動目的】

- ・当初のねらい
 - ①数量概念理解や読み書きの定着が難しい対象生徒に、iPad アプリ DropTalk のスケジュールボードを活用することで、自身で行動できるようになるのではないかと考えた。また、日常場面で数字を積極的に取り入れていくことで、苦手な数字に対する方略と概念形成の可能性があるのでないかと考えた。
 - ②体幹が弱く、疲れという感覚の理解が難しい対象生徒に、「休憩する」という活動を日々の日課に組み入れることで「疲れ」を意識して自身で休憩をとる行動に結びつくのではないかと考えた。
 - ③慣れない人との関わりや人前での発表場面ではうまく発信できない対象生徒に、伝えるべきことを明確にする手立てや、遠隔を活用したコミュニケーションの場を提供することでコミュニケーション力の向上に結びつくのではないかと考えた。
- ・実施期間 4/6～12/20
- ・実施者 児山 卓史
- ・実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象生徒の変化】

- ・対象生徒の事前の状況
 - 【実態】脳性麻痺 療育手帳A1 身障手帳1種2級 太田のステージ評価IV前期 (R3.3月)
- 身体面
 - ・車いすのハンドリム操作での移動が可能。
 - ・身支度などの作業はある程度一人でできる。
 - ・体幹が弱く車いすでは前傾や左に傾いた姿勢で過ごす時間が多い。そのため疲れやすいが、自分の疲れに対する自覚がなく、適宜な休憩など自分でとることが難しい。
- 理解 (読み書き、数量概念、認知)
 - ・読みは1文字ずつで、50音全てを読むことは難しい。最初の1文字から次に続く単語を予想して答え、読み間違いにつながるが多い。
 - ・書字は自分の名前がなんとか書くことができる程度。マス目に合わせて書くことも難しい。

- ・ 2桁以上の数唱ができるが、数量概念は1～3程度。2桁以上の数字の読みはわからなくなってしまう。
- ・ 曜日、日時等の理解はかなり曖昧である。
- ・ 日常会話の内容理解はほぼ問題なくできている。
- ・ 耳から得た情報の理解力や保持能力は高く、10分前に測定した体温などを覚えて伝えることができる。

■コミュニケーション

- ・ ゴニョゴニョと話すためマスク着用では聞き取り難く、話す内容も唐突な話題だったりするため、初めて対応する人に話したいことが伝わりにくい。
- ・ 発表時には何を話せばいいかわからなくなったり「楽しかった」「おいしかった」など表現が乏しかったりする。

■ICT機器の活用

- ・ 昨年度、学期途中より自身のタブレット（Android）を持参し、日記の利用や音声入力でのテキスト作成等を日課として活用しているが定着はしていない。
- ・ 宿題（タブレット端末で夕食を写真撮影する）やタブレット端末を学校に持ってくることを忘れてしまうことが多くなってきた。原因としては現在使用しているAndroidタブレットが重い（物理的に）、開きにくい、写真を取りにくいということから、活用の意欲が落ちてきていることが考えられる。
- ・ 昨年度、教室に常設したスマートスピーカーに「いつもありがとう」「かわいいね」「アレクサさようなら」など、友達のように接しながら積極的に活用した。結果発声はかなり明瞭になり、語彙も豊富になった。

（対象生徒の困りの整理）

困り1：朝の会などの発表時に、何を話したらいいのかわからなくなってしまう。

困り2：予定が漠然としかわからない。

困り3：学校が終わると疲れてしまう。

前提として、困っている様子をあまり感じさせない生徒である。例えば次に何をするのかわからなくなっているような場面ではクラスメイトの言葉かけがあったり、教室移動等の時間がない場面では独歩のできるクラスメイトの支援を受けたりしながら行動している。また、隙間時間は周りにはいる人と歌を聴いたり、UNO やしりとりをして過ごしたりして学校生活、放課後等デイサービス、月に5日程度利用しているレスパイトを楽しむ充実した生活を送っている。

そんな彼の卒業後の生活を、補ってくれるクラスメイトや支援者がいない場面を想定して困りを整理してみた。実際に起こりうる困りに寄り添い自身でできることを増やしていくこと、より生活が豊かになることの2つを目指して以下の取り組みを設定した。

- ①スケジュールを確認して自身で行動する（理解へのアプローチ課題）
- ②日常生活の中で数字を活用する（理解へのアプローチ課題）
- ③自分から休憩をとる（身体面の課題）
- ④朝の会でスムーズに発表する（コミュニケーションの課題）
- ⑤遠隔でコミュニケーションをする（コミュニケーションをより広げる課題）

◆活動の具体的内容

①スケジュールを確認して自身で行動する（理解へのアプローチ課題）

iPad mini を活用した。DropTalk のスケジュールボードで作成した日課を見ながら活動し、やったことを自身でチェックしていく取り組みを設定した。取り組み前に登校時から朝の会までの間の行動を観察した。

登校時の行動の流れの中では「教員への依頼で滞ってしまい朝の支度が間に合わず、結果教員が支援して身支度を整えてしまう」という点が課題であると感じた。依頼自体は時間をかければしっかり伝えることがで

きたため、ここでは依頼の数を減らして自身での活動を優先することにした（図1）。

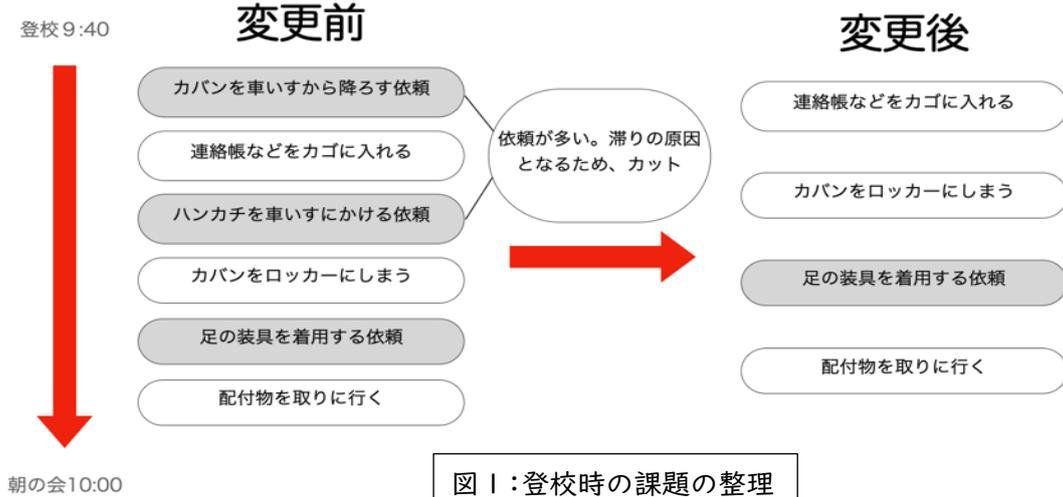


図1：登校時の課題の整理

活動を絞り、「DropTalk」アプリで作成したスケジュールボードを活用することにより、一日の流れの中ですべき行動を自身で確認し、やったことをチェックしながら取り組むことが習慣付いた。年間を通して図2のようなスケジュールを滞ることなくこなすことができるようになった。

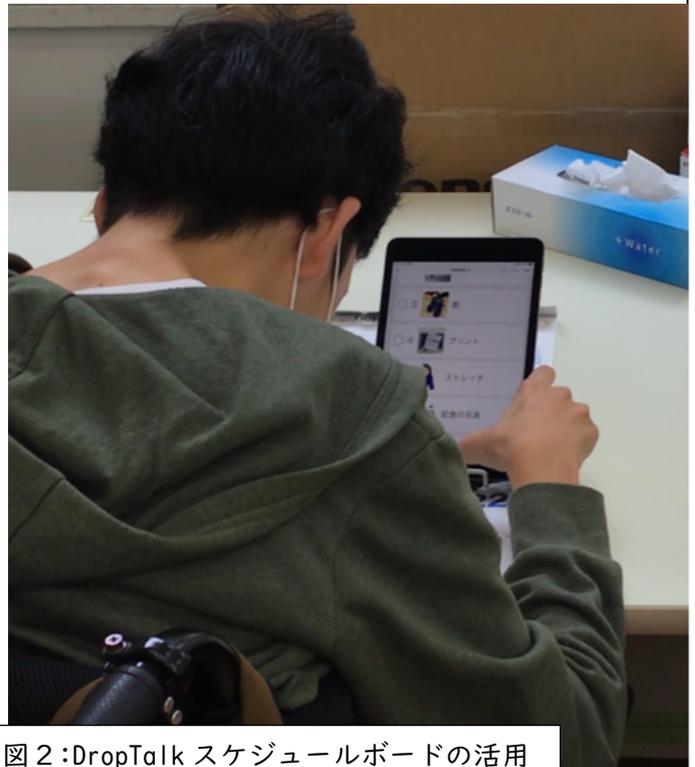


図2：DropTalk スケジュールボードの活用

②日常生活の中で数字を活用する（理解へのアプローチ課題）

○「たいおんログ」での検温記録入力

毎日の検温記録を「たいおんログ」アプリで記録した。①の活動のスケジュールに組み込むことで日課としての定着が見られた。スワイプで体温の選択ができるアプリのため、数字の読みが苦手な対象生徒でも選択することで迷わず入力することができた。実際は 36.9° などの3桁の真ん中の数字を間違えてしまい、誤入力になることが多かったが、教員が「3、6、9」と言葉かけをすることで間違いを自身で修正することができた（図3）。

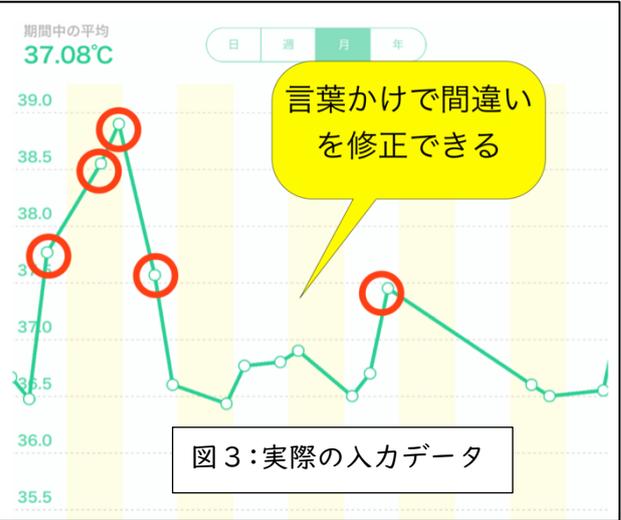


図3: 実際の入カデータ

○カレンダー操作

対象生徒は数量概念が1～3程度の理解だが、数唱は30程度まで可能なため、カレンダーを読む課題を通して曜日感覚と数量概念の理解に繋がることを目標として設定した。

具体的な課題として、登校時に月めくりカレンダーの「今日」の日付に学校のシンボルを置き、施設見学やレスパイトの日が「今日」から何日あるかを数えるという取り組みである(図4)。まず、毎日欠かさずカレンダーの操作を行うという日課として定着が見られた。

この取り組みは数量概念の理解においても効果が見られた。当初は「レスパイトの日は？」という問いに対して「わからない」と答えていたが、取り組みの半ばくらいには「数えてみたら？」という言葉かけに応じて、「今日の日付」から「レスパイト」までの日数を「1、2、3・・・」と自身で数え、「あと8日？」など、今までの「わからない」という回答が具体的な日数での回答に変わってきた。

反面12月までの取り組みの中で2桁の数字を一目で捉えることは難しく、「23日はどこ？」というような質問に応じてカレンダーの23日を見つけることはできなかった。「2と3だよ」という言葉かけをすることで「23日」を見つけることができた。

曜日感覚については理解の深まりが見られた。23日を移動させた後、指を上スライドさせて曜日を確かめて「金曜日か」と言うようになった。



図4: 使用したカレンダーと活用の様子

③自分から休憩をとる(身体面の課題)

一日の学校生活では車いすで過ごすことがほとんどの対象生徒は、体幹が弱く姿勢も崩れがちであることから、午後に動きが緩慢になる、眠くなるなどの、疲れの症状が見られることが多い。自身は「大丈夫」と言うが、学校後の活動場所である放課後等デイサービスでは寝てしまうことが多い。自分の身体のためにも休憩をとるということは大切である。身体が楽になることを実感することで疲れた時に「疲れた」「休みたい」

と伝える方法を身につけていく必要があると感じた。まずは学校生活の中で一度は車椅子から降りて横になる時間を作ることを日課に取り入れた。

6月中は教員が言葉かけをすると「休憩」することができたが、言葉かけがないと「休憩」することができなかった（図5）。

6月後半から7月に入り、校内実習（就労に向けた取り組み）が始まった。本校の高等部では「バスボム作り」「メモ帳作り」「ボールペン組み立ての受注作業」など様々な作業種を設定している。対象生徒が所属しているのは「メモ帳作り」だが、より難易度の高いボールペンの組み立て作業に意欲を持ち、毎日休憩時間に2本ずつボールペンを組み立てる課題に自らチャレンジした。ボールペン班の担当教員から「ボールペンの作業をやるためには休憩も必要だよ」と言われたことをきっかけに、「休憩する」と教員に伝え、自ら取り組む様子が見られるようになってきた（図6）。



		休憩	
6/1	火	×	
6/2	水	×	
6/3	木	○	促されて
6/4	金	×	
6/7	月	×	
6/8	火	○	促されて
6/9	水	○	促されて
6/10	木	×	
6/11	金	×	
6/14	月	×	
6/15	火	×	
6/21	月	×	
6/22	火	×	

図5：6/1～22の様子

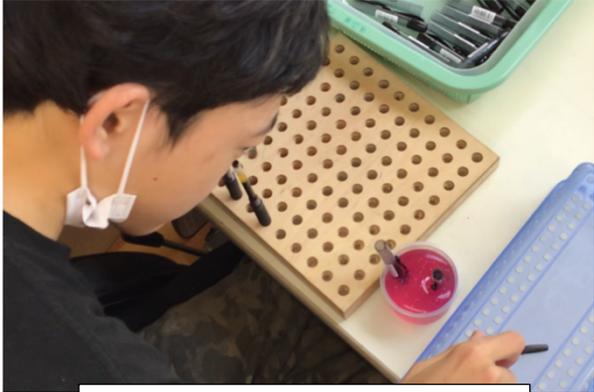


		休憩	
6/23	水	○	自主的に
7/1	木	×	
7/2	金	×	
7/5	月	×	
7/7	水	○	自主的に
7/8	木	×	

図6：6/23～7/8の様子

促されなければ休憩を自分からとることはなかった。

ボールペンの組み立てに取り組み始めてからは自主的に休憩をとるようになってきた。



ボールペン組み立て作業の様子

（「休憩」について）

「休憩」は対象生徒が負担感なく一番簡単にできる方法として、車いすから教員の支援を受けながらフロアベッドに移乗する方法で行っている。横になった状態で伸びをしたり、スマートスピーカーで音楽を聴いたりトリラックスして過ごせる環境を整えた。



「休憩」時の様子

（実習先での体験）

学校では作業姿勢の改善のため、傾きやすい左側に肘のサポート、支える持ち手の設置を行うことで非常に安定した姿勢でボールペンの組み立て作業を行うことができた。しかし9月の校外実習では、学校のようなサポートを設置することが難しく、非常に辛い姿勢で5日間のボールペンの組み立て作業に取り組まねばならなかった。疲れ切った対象生徒は自ら「休憩したい」と申請するようになった（図7）。これ以後、学校で休憩の提案を受け入れたり、自分から休憩したりするということの定着が見られるようになった。「疲れ」ということへの意識が変わってきたようである（図8）。



図7：実習先で休憩する様子

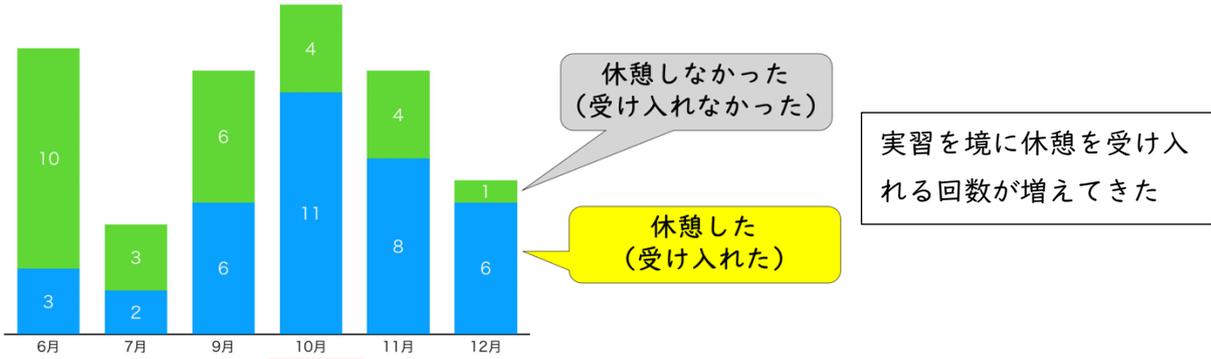


図8：休憩をした（受け入れた）回数の変化

④朝の会でスムーズに発表する（コミュニケーションの課題）

発表時に何を話せばいいのかわからなくなってしまう対象生徒が発表しやすいように「1. 昨日の夕食」「2. 今日頑張ること」の二つのことを発表すべきこととして設定した。以下、取り組みの様子である。

『1. 昨日の夕食』

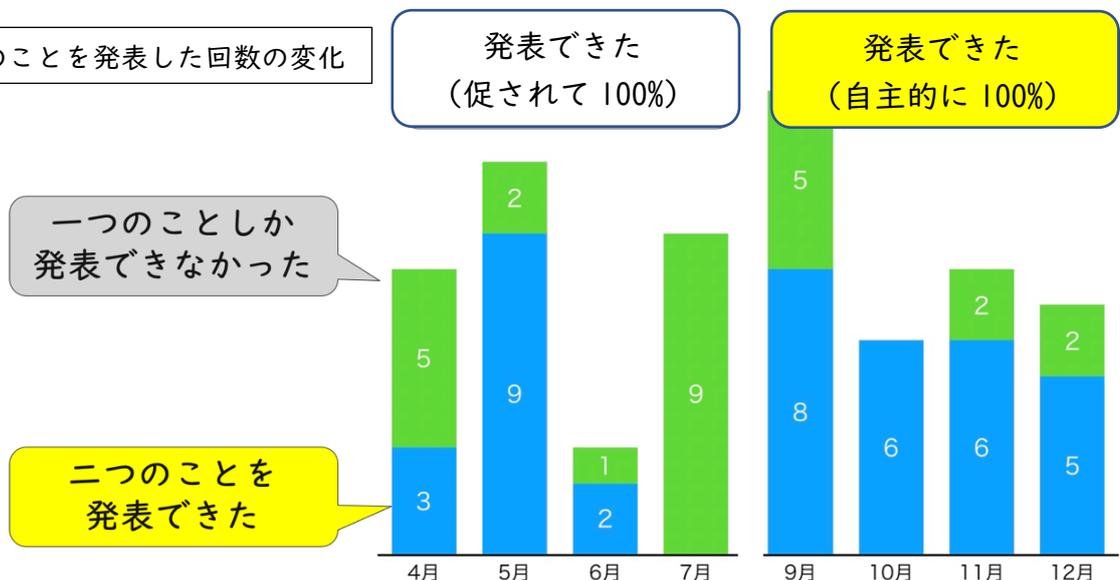
取り組み当初からスムーズに導入できた。「おいしかったです。以上です」というパターンを自身で作り、スムーズに発表できるようになった。

『2. 今日頑張ること』

7月まではクラスメイトに「今日頑張ることは？」と促されることによるのみ発表することができた。いつも促すクラスメイトが校外実習等で不在の7月は、「今日頑張ること」を発表することは一切なかった。

しかし、夏休み明け9月から「あ、そうだった、今日頑張ることだった」と言い、二つのことを自主的に発表するようになった（図9）。理由の詳細は不明だが、夏休み前に何を発表していたのかを自身で振り返った時、クラスメイトの執拗な促しを思い返したのではないだろうか。

図9：二つのことを発表した回数の変化



⑤遠隔でコミュニケーションをする（コミュニケーションをより広げる課題）

毎週月曜日、校内の職員から注文を取り、ドリンクを購入して届ける UberDrinks という活動を行っている（図 10, 11）。この活動は「歩行の時間の確保」「人と関わらないでできる買い物学習」「校内を地域と見立てて行う接客の学習」の三つを柱に、コロナ禍でもできる地域を意識した取り組みとして昨年度より実施している。IC カード活用の学習に最適であるとともに、「Coke On」というアプリを活用することでドリンクチケットが手に入り、仕事の報酬としてドリンクをもらうというモチベーションにつなげることもできる。

対象生徒は昨年度までは主に 1F の教室や事務室の職員を対象に注文を取る活動を行っていたが、2F 職員室への注文は歩ける生徒しか行えなかったため、経験したことがなかった。遠隔で行うことで 2F 職員室への注文も可能になるのではないかと考え GoogleMeet による遠隔でのドリンク注文の課題を設定した。

事前に「いらしゃいませ」「かしこまりました」「ありがとうございます」という決まったフレーズで対応することを確認してから行った。一回目は教員が横で支援しながら復唱する形だったが、その後は自身でスムーズにやりとりを進めることができるようになった。「おすすめは？」の質問に「〇〇はいかがですか？」「爽やかな気持ちになりますよ」などのアドバイスをアドリブで入れる様子も見られた（図 12）。また、実際に歩いて注文を取るよりも効率的で、注文数は 3 倍に増えた。

Uber Drinks 近くの自動販売機でドリンクを買ってくる代行サービス（教職員対象）

コロナ禍でもできる地域を意識した活動

人と関わらないでできる買い物学習

コロナ禍でも確保したい歩行の時間

校内を地域と見立てて行う接客の学習



図 10:UberDrinks のシステム

毎週月曜日 9:30~12:00

時間/教科領域	生徒の活動	注文を取りに行く場所
9:30~10:00 自立活動	注文を取る①	・ 1F事務室 ・ 1F高等部 1~3年教室
10:15~10:30 自立活動	注文を取る②	・ 2F職員室
10:30~11:20 学級活動	買い物 (学校の近くの自動販売機)	
11:30~12:00 自立活動	配達	
翌日 9:30~10:00	お金の回収	

図 11:UberDrinks 実施時間

2F 職員室は車いすでは行けないが、遠隔なら可能。

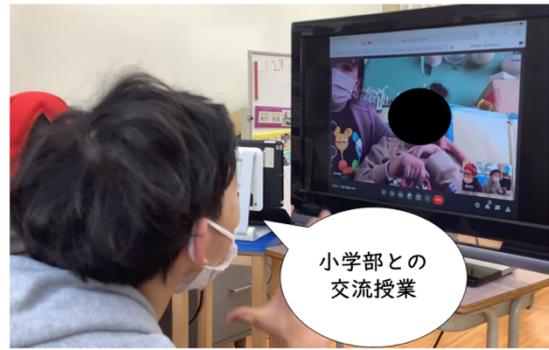


図 12:遠隔での注文の様子

GoogleMeet による遠隔は、その後も進路面談、他県に移動した昨年度の担任とのやりとり、学校内の交流授業などに活用し、積極的にコミュニケーションする様子が見られた（図 13）。



広島にいる
昨年度の元
担任と



小学部との
交流授業



OriHime 操作
での受注



進路面談

図 13: GoogleMeet を活用した遠隔での取り組みの様子

◆対象生徒の事後の変化

①スケジュールを確認して自身で行動する（理解へのアプローチ課題）

ツールを活用することで、自身で確認しながら行動できるようになってきた。

②日常生活の中で数字を活用する（理解へのアプローチ課題）

カレンダーから予定を読み取ることができるようになってきた。また数字を活用する方略が見えてきた。

③自分から休憩をとる（身体面の課題）

疲れに対する意識が芽生え、自分から休憩をとる習慣がついてきた。

④朝の会でスムーズに発表する（コミュニケーションの課題）

朝の会でスムーズに発表できるようになった。

⑤遠隔でコミュニケーションをする（コミュニケーションをより広げる課題）

遠隔でも伝わりやすい対応ができるようになった。

【報告者の気づきとエビデンス】 *エビデンスは【活動内容と対象生徒の変化】に含む

・主観的気づき

○日々の活動のなかにルーティンとして課題を取り入れていくという手立てが、毎日欠かさず取り組む対象生徒の姿勢にマッチし、結果本人の成長に結びついたのではないかと。数や文字など、苦手なものでも日々の活動に自然と組み込んでいくことで、活用できる方略があることがわかった。継続することで、今後の概念形成に結びついていくのではないだろうか。

○ICT 機器の活用によるスケジュール確認は、自分自身で行動するための手立てとして有効だった。

○ICT 機器も含めた様々な手段でのコミュニケーションの経験を積むことで、自分自身で伝え方のコツを身につけていくことができたのではないかと。

○自身で意志決定した活動の中で、より効率的に取り組むためには身体的な面も大切であるという気づきが自身の中に芽生えたのではないだろうか。

